

骨折の治療においては、歯牙や咬合に対する十分な配慮が必要であると考えられた。

#### 7. 下顎角部骨折の臨床統計的観察 —とくに智歯との関係について—

笠松厚志, 渡邊俊英, 金沢春幸  
(君津中央)

1993年から2002年までの過去10年間に当科において治療を行った下顎骨骨折151例のうち下顎角部骨折53例を対象に智歯との関係について臨床統計的観察を行った。下顎角部骨折53例中、48例に下顎智歯が存在しており、 $P=.0004$ で智歯の存在が同部骨折の危険因子になっているものと示唆された。

#### 8. 合併症を有する口腔癌患者の周術期管理の検討

小野可苗, 武川寛樹 (千大)

1997年1月から2002年9月までの5年8か月間に当科を初診した口腔癌一次症例で根治的手術を施行した144例のうち、有病者90例を対象とし、術前の background を調査し、術後合併症の発生率・発生部位を検討した。結果として、循環器疾患・糖尿病・高齢(75歳以上)は単独であっても、術後合併症は増加した。循環器と呼吸器が合併すると術後合併症は80%と最も high risk であった。糖尿病は他の risk factor が合併するとかなり high risk となったが、HbA1c や FBS を術前に control できれば術後血糖変動は安定した。

#### 9. 当科における入院を要した重症感染症の臨床的観察

露崎知孝, 椎葉正史 (千大)

過去15年間に当科で入院を要した重症感染症患者42人について年齢、性差、疾患の原因、原因菌、膿瘍の波及部位、検出菌の抗菌薬感受性、処置内容、基礎疾患との関係等についてまとめた。その結果、40~50歳代、特に男性が多かった。また糖尿病を有する患者で重篤度が高く、糖尿病を有する患者においては、重症化に特に留意することが重要であると示唆された。

#### 10. 成田赤十字病院の歯科・口腔外科の診療統計

篠澤 医, 宮 恒男 (成田赤十字)

成田赤十字病院歯科口腔外科の開設後2年間の統計を報告した。受診患者数は1910名でそのうち印旛郡市も割合が1449名で75.9%を占めた。院外からの紹介は915名、紹介率は47.9%であった。院内での紹介は内科、耳鼻科、整外順で多く、院内紹介の58.2%を占めていた。疾患別では智歯周囲炎が18.8%と多く、救急受

診は外傷が79.0%と多かった。全麻手術は2年間で100件、嚢胞摘出術が34%と最も多かった。

#### 11. 当科で経験した鼻口蓋管嚢胞13例の臨床病理学的検討

山木 誠, 田中千恵子, 高橋喜久雄  
(船橋中央)  
近藤福雄 (同・検査部)

1996から2002年の7年間に社会保険船橋中央病院歯科口腔外科を受診し、臨床所見と病理組織学的所見とから鼻口蓋管嚢胞と診断された13例を対象とした。男性10例、女性3例で平均51.6歳であった。裏装上皮は扁平上皮、移行上皮、繊毛円柱上皮など様々であった。臨床診断は比較的容易であるが、病理組織学的診断のみで確定診断ができる疾患ではなく、臨床所見、手術所見をあわせて診断する事が重要であると考えられた。

#### 12. 頬部に見られた epidermoid cyst の2例

富樫 啓, 川崎建治 (福島県医大)

症例は76歳と25歳で共に男性であった。両者とも T1 強調像では低信号、T2 強調像では高信号を持つ円形の境界明瞭の mass を認めた。術式は各々、口腔外からと、口腔内からのアプローチで、嚢胞摘出術を施行した。病理診断は、ともに類表皮嚢胞であった。口腔顎顔面領域の類表皮嚢胞の部位別分布は、おおよそばらつきがあり、約4分の1が頬部に発生していた。症例1のような高年齢者は、比較的稀な症例だった。

#### 13. 生下時にみられた口唇粘膜嚢胞の2例

渡邊俊英, 笠松厚志, 金沢春幸  
(君津中央)  
松崎 理 (同・検査科)  
花澤康雄, 栗林良英 (川鉄千葉)

今回、生下時より下唇に認められた先天性粘液嚢胞を2例経験したので報告した。症例1は生後1か月の男児。症例2は生後3か月女児。生下時より下唇正中部に粘液嚢胞の存在を認めた。病理組織学的診断は両症例とも溢出性粘液嚢胞であった。先天性粘液嚢胞の発生について諸説を検討するとともに過去31年間の国内外文献渉猟で得た13例に自験例の2例を含めた15例について臨床的に検討を行った。